

【メルディア】一般財団法人メルディア 広報誌

FREE

VOL.75

SEP.2026

MELDIA

おさんぽ **DE** 楽しむ！
箱根小涌園ユネッサン＆
ホテルビュッフェで遊び尽くす！

ハローワーク町田×
一般財団法人メルディア

それぞれの視点から語る
障がい者雇用の現状と未来

映画監督・君塚匠インタビュー

生きづらさの中で続けてきた映画制作。
ADHDの診断を経て、
還暦から歩む君塚匠の今

「すでに私たちは、
共に生きている」

——東ちづるさんがエンタメを通して発信する、
誰も排除しない“まぜこぜ”の未来

CHIZURU AZUMA

「すでに私たちは、共に生きている」

——東ちづるさんがエンタメを通して発信する、誰も排除しない“まぜこぜ”の未来

俳優・一般社団法人Get in touch(以下、Get in touch)の代表として活動する東ちづるさん。Get in touchを率いる彼女が、震災時の避難所で目撃した現実から、エンタメの力で「誰も排除しない社会」を目指す理由、そして「団体解散」を目指す未来に向けてのメッセージを語ります。



CHIZURU AZUMA

「34年前、32歳のときに骨髓バンクを中心とした活動を始めて以来、活動を続けてきました。当時は『周りに迷惑をかけてはいけない。自分のミスで取り返しがつかないことになったら怖い』という思いがあり、ずっと一人で活動していたんです」。そう振り返る東さんが団体（Get in touch）を立ち上げたのは、2011年の東日本大震災がきっかけでした。

「被災地の避難所はまさに日本の縮図で、あらゆる人が集まる『まぜこぜ』の状態でした。そこで目にしたのは、普段から生きづらさを感じている人たちがさらに追い詰められていく現実です。見えない・聞こえない方が物資の情報を得られなかったり、自閉症の特性がある方が誤解されて怒られたり、障がいのある子の家族が周囲に遠慮して避難所を諦めたり。『日本は一つ』という素晴らしいスローガンの陰で、取りこぼされる人たちがいる事実がショックを受けました。私たちはすでに社会の中で一緒に生きている。その事実を可視化し、体感できる活動をしなればと強く思ったんです」。それまで組織や団体が苦手ですが、その誘いを断ってきたという東さんですが、「同じ思いを持つ人たちと繋がる

誰も排除しない、可視化された
“まぜこぜ”の未来へ

CONTENTS

VOL. 75

MELDIA
2026 SEP.

03 「すでに私たちは、共に生きている」

——東ちづるさんがエンタメを通して発信する、誰も排除しない“まぜこぜ”の未来

06 第30回全日本IDバレーボール選手権大会

感動と熱戦の2日間をレポート!

09 130種類の業務から「得意」を発掘!

能力を活かし、誇りを持って働ける職場 ポラスシェアード

12 映画監督・君塚匠インタビュー

生きづらさの中で続けてきた映画制作。

ADHDの診断を経て、還暦から歩む君塚匠の今

14 資産だけでなく、「親の想い」と「ルール」を遺す。

「親なきあと」も自律と意思が尊重される社会へ
～従来の後見制度に頼らない新しい選択肢「分離型後見」とは～

16 無人島が教えてくれた、支援の枠を超えた幸せの循環

**映画 Return to My Blue
野口雄大監督インタビュー**

18 ハローワーク町田×一般財団法人メルディア

それぞれの視点から語る障がい者雇用の現状と未来

20 「育て方のせい」と思う前に。

**子どもの違いは、責めるものではなく、
個性として応援するもの。**

22 おさんぽ DE 楽しむ!

箱根小涌園ユネッサン&ホテルビュッフェで遊び尽くす!

24 シンママまると息子の成長記録 VOL.9

時代とともに変わる環境と暮らし 健康で快適に過ごすためにできること
水越けい M Size はじまり Again

メルディアライフネスト浦和企画
メイクの力で、もっと自分を好きになる!

TPO別「あか抜け」大变身講座

メルディアライフネスト浦和が贈るライフプログラム

**日常の不安を解消し、社会生活を豊かにするための
「知恵」と「素材」を届ける**

31 **プレゼント**





ことで、力は何倍にもなる」と確信し、新たな一歩を踏み出しました。

楽しいワクワクする空間が新しい人間関係を築く

東さんが社会へメッセージを届けるために選んだ手段、それが「エンターテインメント」の力です。「講演会やシンポジウムには意識の高い仲間が集まって

縦割りの壁をなくし、社会の中に「頼れる味方」を増やす

一人で抱え込まず、社会の中に「頼れる味方」や「相談できる場所」を一つでも多く作ってほしいという東さん。「家族だけで解決しようとする、関係性が固定化されて負担になってしまいます。医療関係者でも地域の団体

でも、フラットに対等な立場で繋がれる関係をたくさん散りばめておくことが、未来の安心に繋がります」。

さらに障がいの種別を超えて、横に繋がることの重要性を訴えます。「自閉症、ダウン症、脳性麻痺、LGBTQ、あるいは見えない・聞こえない人たち。それぞれが『縦割り』のままで声を上げていては、一つの声は小さくなってしまいます。みんな同じように『誰もが尊重される社会にしたい』と願っているのだから、横に繋がってみんなで声を大きくしていかなければ進みません。誰とも比較しなくていい



この日は、「魔ぜ混ぜアート展と、Get in touch15年の歩み「妖の館」PEACE&LOVE with YOKAI」にお邪魔し取材。

東ちづる(俳優／一般社団法人Get in touch代表)

ドラマや映画、情報番組のコメンテーター、司会、講演、出版など幅広く活躍。2012年10月、アートや音楽、映像、舞台などのエンタメを通じて、誰も排除しない「まぜこぜの社会」を目指す「一般社団法人Get in touch」を設立し、代表として活動中。

一般社団法人Get in touch

<https://www.getintouch.or.jp/>
Warm Blue Day、Warm Green Day、まぜこぜ一座の最新公演情報などは公式サイトをチェック！



Get in touchオリジナルマーク「PEACE&LOVE」があしらわれたグッズや、東さん自ら61体のオリジナル妖怪を描き、社会風刺満載の独自の解説をした「妖怪魔混大百科」などをプレゼントいただきました！



計3名様 PRESENT

A

Get in touchオリジナル「PEACE&LOVE」Tシャツ、タオルセット 1名様

B

Get in touchオリジナル「PEACE&LOVE」トートバッグ、キーホルダーセット 1名様

C

東ちづる著「妖怪魔混(まぜまぜ)大百科」(ゴマブックス)、NICI妖怪ぬいぐるみキーホルダーセット 1名様

詳しくはP.31



その場で、永野事務局長の「妖怪風似顔絵」をするすると描く東さん。



と分かれれば、すぐに『20分にします』と伝えます。すると、歩ける人たちが『私はこっちのトイレに回るね』と自発的に譲り合い始める。これが気づきなんです。体験して、体で感じることで、お互いに行えること・できないことを自然と配慮し合えるようになっていきます」。

完璧に理解し合えなくても、ただ「排除しない」

インタビュー中、東さんは世間でよく使われる「理解する」「受け入れる」という言葉に、違和感を投げかけました。

「これらの言葉って、どこか上から目線に感じてしまうんです。私たちは誰かに許可されて生きているわけではなく、もうすでにここで一緒に暮らしていますよね。わざわざ境界線を引いて分断する必要はありません。完璧な知識がなくても、お互いに分からない者同士でいいじゃない、と思うんです。人間ですから相性もありますし、みんなが無理に仲良くならなくてもいい。挨拶だけして、お昼ご飯は一緒に食べなくていいんです。大切なのは、個人の好き嫌いではなく、社会の仕組みや制度として誰かを『排除しない』こと。まずはそこです」。

かつて世界13カ国の自閉症啓発団体が集ったアメリカでの会議に参加した際には海外の啓発活動のあり方に大きな刺激を受けたと言います。

2013年の世界自閉症啓発デーでは、イベント「Warm Blue Day」を開催。「青いものを身に付けて街に出よう」と呼びかけ、Warm Blueの活動が本格的にスタート。



「他国では、著名人や政治家のご家族に障がいがある場合、CMや活動へ顔出しで堂々と登場し、『うちの子、本当にユニークで最高なんだよ!』と、包み隠さずその魅力を笑い合って発信していました。当時の日本では、まだどこか『大変でかわいそうな物語』としてドラマチックに扱われがちだった。自閉症という言葉、隠すことではなく当たり前の個性として発信したい。だからこそ私たちは、世界自閉症啓発デーに合わせて『Warm Blue Day(ウォームブルーデー)』を掲げ、優しく扉を開くアプローチを続けてきました」。



広々とした会場では4面のコートに分かれ、各所で一斉に熱い戦いが繰り広げられました。参加したのは経験豊富な社会人チームから、フレッシュな高校生中心のチームまでさまざまです。中には40代のエース選手が躍動し、ベテランならではの巧みなプレーで会場を大きく沸かせる場面も見られました。

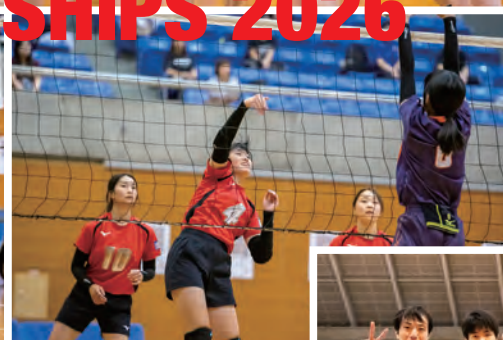
注目の男子決勝は、東京都選抜と愛知県春日井クラブによる対決です。1セット目は東京都選抜が鋭い攻撃で先制して勢いに乗るも、2セット目には春日井クラブが見事な巻き返しを見せてセットを取り返し、勝負は運命の最終セットへもつれ込みました。きれいに上



ALL JAPAN ID VOLLEYBALL



CHAMPIONSHIPS 2026



白熱の試合レポート！ 歓声と感動に包まれた試合のゆくえ



がったバックトスからの強烈なアタック、そしてそれを懸命に拾い上げるラリーが何度も続き、観客も息をのむ大接戦に。手に汗握る展開の中、最後まで集中力を切らず自分たちのペースを保ち続けた春日井クラブが勝利を掴み取り、見事に優勝の座に輝きました。

一方、女子の決勝戦では兵庫WAVE Sと長野ESPORIR女子が激突しました。お互いに粘り強い拾い合いを見せ、一歩も引かない接戦のまま決着は3セット目へ。最終セットも一進一退の攻防が続きましたが、最後は兵庫WAVE Sが気迫あふれるプレーで押し切り、歓喜の優勝を果たしました。試合終了の笛が鳴ると、コート上の選手たちへ会場全体から健闘を讃えるあたたかい拍手が惜しみなく送られました。



第30回全日本IDバレーボール選手権大会

感動と熱戦の2日間を レポート！

全国から集結した選手たちが、コートで熱い戦いを繰り広げた2日間。日頃の練習の成果を十分に発揮したプレーの数々や、熱気あふれる会場の様子、そして優勝チームの声までお届けします。



寄贈レポート
一般財団法人メルディア 代表理事 小池信二

選手のひたむきな姿に、スポーツの力を実感

一般財団法人メルディアとして、本大会に協賛しました。

選手の皆さんへの取材も行い、大会の様子や競技に懸ける想いをご紹介しています。ボールを懸命につなぐ姿、仲間を励ます声、得点が決まった瞬間の歓声など、どの試合も手に汗握る熱戦だったことが伝わってきます。

最後まで諦めずにプレーする選手の皆さんの姿には、日頃の練習の積み重ねとチームの強い絆を感じました。また、選手を支えるご家族やスタッフ、会場から声援を送る皆さんの温かさ、この大会の大きな魅力だと思います。

本誌を通じて、その熱気や選手の皆さんの想いを感じていただければ幸いです。これからも、選手の皆さんの挑戦と、IDバレーボールの発展を応援してまいります。

**節目を迎えた記念大会
全国から集う強豪チームの挑戦**

日本IDバレーボール連盟が主催する「全日本IDバレーボール選手権大会」が、今年で記念すべき30回の節目を迎えました。

2026年8月9日・10日の2日間、千葉県のパルドラル浦安アリーナで開催され、全国各地の予選を勝ち抜いた男子15チーム、女子9チームが勢揃いしました。初日は予選グループ戦が行われ、翌日の決勝トーナメント戦では、各チームが日頃の成果を発揮し、白熱した順位争いを繰り広げました。

試合は3セットマッチで行われ、先に2セットを先取したチームが勝利となります。前回の大会で優勝したチームが「第1シード」、準優勝チームが「第2シード」として組み込まれるシード制が採用されており、男子の部では東京都選抜が第1シードを、春日井クラブが第2シードとして大会に臨みました。そして見事な勝ち上がりで今年もこの2チームが決勝戦へと駒を進めました。

年々大きな盛り上がりを見せ、競技レベルも一段と高まっているIDバレーボール。メルディアでも本大会への協賛を通じて、選手たちの熱戦をサポートいたしました。私たちはこれからも、IDバレーボールに励むみなさんの挑戦をあたかく応援してまいります。

130種類の業務から「得意」を発掘！ 能力を活かし、誇りを持って 働ける職場 ポラスシェアード

一人ひとりの個性を力に変え、プロとしての自立を支えるポラスシェアード株式会社。
「黒字経営」と「誰もが安心して働き続けられる環境」をともに実現する、同社の独自の取り組みと情熱に迫ります。

**単一作業から脱却し
他にはない特例子会社へ**

埼玉千葉・東京で、住宅事業を展開するポラスグループ。その特例子会社として2015年に設立されたのが、ポラスシェアード株式会社です。

一般的に「特例子会社」と聞くと、清掃やデータ入力など、決まった単一の作業を繰り返すイメージを持つ人が多いかもしれませんが、ポラスシェアードの働き方は大きく異なります。取締役の湯村元昭さんは、自社のスタンスをこう語ります。

「色々な特例子会社を見の中で、1日中単一の業務をしているところが多いと感じていました。ですが、当社の場合は1日に5種類ほどの仕事をこなす社員も



取締役 湯村元昭さん
一級建築士、宅地建物取引士などの資格を持つ。
2024年にポラスシェアードの取締役に就任。

います。グループ内の様々な事業部で困っていることを、支援できる会社を目指しています」。

ポラスグループでは住宅建築から賃貸、ガス、水道など多岐にわたる事業を行っています。

湯村さんは自ら各現場へと足を運び、「困っている仕事はありませんか？」と声をかけて回りました。さらに、社内ポータルサイトで「こういう事業部からこんな仕事を受けました」と発信し続けることで、グループ

各社との間にある壁を少しずつなくしていったのです。

その結果、請け負う業務は130種類以上にまで拡大。グループ全体の困りごとを解決する頼もしいパートナーとして、成長を続けています。

**趣味や個性の中に
隠された才能を見抜く**

多種多様な仕事がある同社ですが、大切なのは「誰にどの仕事を任せるか」というマッチングです。湯村さんは着任時、全社員と30分ずつの個別面談を行い、その人の特性や強みを知るところから始めました。

そんな中で生まれたのが、社員の意外な趣味から才能を開花させたエピソードです。ある知的障がいのある男性社員

ポラスグループ各社の業務



コートで輝いた王者たち！ 優勝チームインタビュー

男子優勝の「春日井クラブ」、女子優勝の「兵庫WAVES」の監督・選手に喜びの声を聞きました。激闘を振り返るとともに、次なる大会への意気込みも伺いました。



男子チーム
春日井クラブ 監督 森基成さん

い抜けたことが良かったです。強気なプレーや厳しい場面でも平常心を保つメンタル面にはまだ課題もありますが、10月に青森で開催される全国大会、そして来年の本大会連覇に向けて、さらなる成長を目指していきます。

春日井クラブ
キャプテン 平野 圭人さん



当チームは春日井高等特別支援学校の現役生、卒業生の混成チームで、18歳から40代までのメンバーで構成されています。選手の大半は未経験から部活動でバレーを始め、現在は仕事と両立しながら週1回の練習に励んでいます。限られた時間だからこそ、質の高さを意識して取り組んできました。今大会は苦しい場面でも折れず、効果的なサーブで相手を崩す粘り強さを発揮できました。アウェイの雰囲気の中でも気持ちを切らさず戦

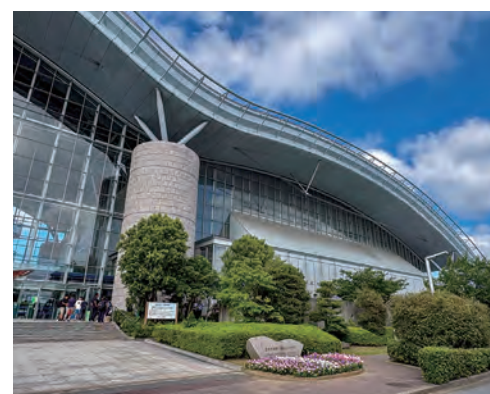
3試合を勝ち抜く中で、チームがひとつになり、最後まで一生懸命頑張れたことは大きな自信になりました。ずっと勝ち切れなかった東京都選抜に対し、1

セット目を先取されても気持ちは切れていませんでした。『自分たちのやるべきことをやろう！』と声を掛け合い、全員で士気を高めて見事逆転できたことが本当に嬉しいです。サーブレシーブやスパイクレシーブなどはさらに精度を高め、この勢いのまま2カ月後に控える全国大会に挑みます。2年前の全国障害者スポーツ大会で3位だったので、次こそは優勝を掴み取りたいです！

女子チーム
兵庫WAVES
監督 小笠原悠さん



特別支援学校の在校生・卒業生をはじめ、15歳から27歳までの幅広い世代が集まるチームです。世代を越えて支え合い、交流できるのが魅力です。今大会は『どんな場面でもやり続けること』を目標に臨みました。苦しい展開でも崩れず、練習してきたことを信じてコートで表現してくれた選手たちを誇りに思い



日本IDバレーボール連盟
<https://idvolleyball.jimdofree.com/>



閉会式では、主催者から優勝した両チームへ賞状とメダル、記念ボールが授与。選手たちは誇らしげな表情を見せた。



ます。波が相手に傾いた際、自分たちの自信を保つメンタル面など課題もありますが、一歩ずつ成長していきたいです。この勢いのまま、去年悔しい思いをした全国大会での優勝を目指します。

から「1日8時間も戦関係のゲームをやっている」という話が出てきました。それはただの雑談でしたが、住宅設計の現場経験がある湯村さんの捉え方は違いました。

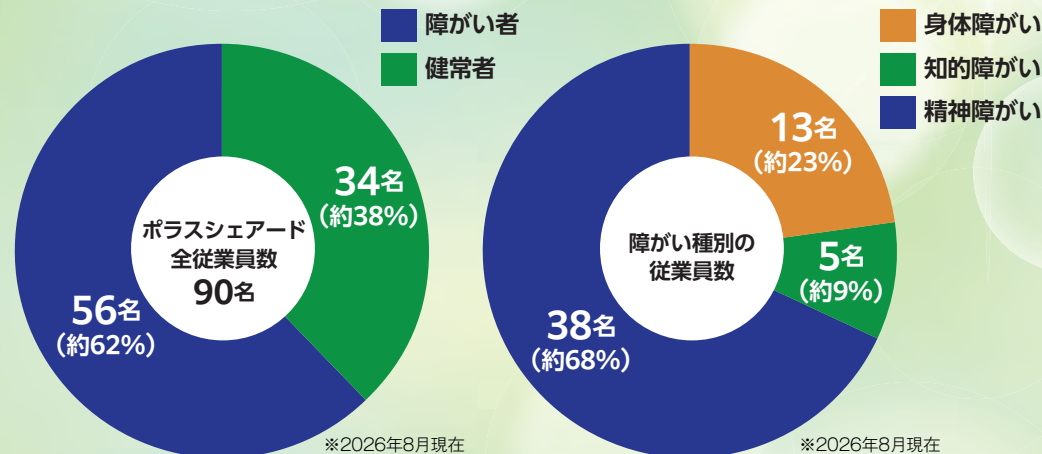
「3次元の空間で戦うゲームができるということは、空間認知ができているということですよ。さらに指先も器用。この人なら図面の理解も早いし、CAD（PCを使った製図）も覚えられるだろうなと思ったんです」。

実際に湯村さんが直接パソコン操作や図面の描き方を教えてみると、彼は驚くほどのスピードで技術を吸収していきしました。今では難易度の高い建築CADの業務を任せられ、夢中になって図面に向き合っています。「周囲は『難しいだろう』と思っていたようですが、素晴らしい才能が開花しました」と湯村さんは笑みをこぼします。一見、仕事とは関係なさそうな知識や得意なことが、ここでは大きな強みへと変わっていくのです。

成長を正当に評価し働くモチベーションへ

ポラスシェアードでは、福祉的な配慮を大切にしながらも、

人員構成・障がい者の内訳



ポラスシェアードでは、全従業員の半数以上を障がいのある社員が占め、多種多様な業務で活躍している。

民間企業として利益を出し、社員に還元する姿勢を重視しています。

障がいのある社員が成長し、リーダーとなってチームをまとめたり、後輩を支えたりする場面も珍しくありません。湯村さんは、社員の成長と評価について強い思いを持っています。

評価されるお仕事をご用意してお待ちしています」。

福祉的な保護に頼るのではなく、一人ひとりの可能性を信じて「得意」を引き出し、プロフェッショナルとして正当に評価するポラスシェアード。「自分にもできることがある」という実感が、ここで働く社員たちの大きな誇りと輝きにつながっています。

得意を活かして働く社員インタビュー



Aさん(入社6年目／発達障がい)

苦手な業務を克服しリーダーとして活躍中

最初はPCもおぼつかず、スケジュール変更が多い業務でのマルチタスクに

苦労しました。ですが、ToDoリストや付箋でタスクを可視化し、一つひとつ克服してきました。パートで入社し、周囲のあたたかいサポートのもと着実にステップアップを重ね、今春、正社員登用に。現在は浦和レッズとのコラボグッズなどの社内販売を担当しています。最近

は簿記3級を取得しましたが、今後も資格取得に挑戦し、より深く会社を支えられる存在になりたいです。



Bさん(入社14年目／知的・発達障がい)

アビリンピックに出場し全国大会で入賞を果たす

会社から声をかけられたのをきっかけに、2017年からアビリンピックに毎年挑戦しています。実は元々、入力スピードは速いものの正確性に欠け、県大会でも銅賞止まりが続いていました。ですが、同僚の全国大会出場に刺激を受け、自分の弱点を客観視して工夫を重ねた結果、県大会3年連続金メダルを獲得。昨年はついに全国大会で銅賞に輝き

「障がい者が障がい者を支える」というのは、本人に成長の場を与え

るということですね。あえて「今の仕事は黒字だよ」

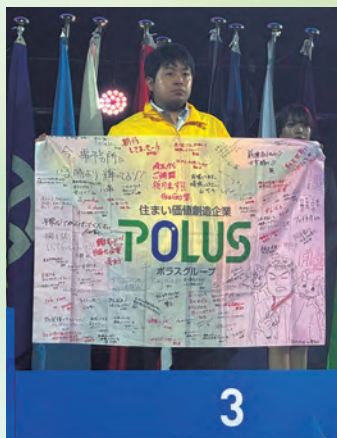
「赤字から転換したね」と数字で伝えることもあり

ます。成長させて、評価をして、給料を上げていく。それが本人の一番のモチベーションにつながります」。

会社から頼りにされ、自分の頑張りが給料やボーナスという目に見える形で評価される。この仕組みが社員たちのやりがいを生み出しています。障害者技能競技大会（アビリンピック）に挑戦する社員も多く、全国大会を目指して自宅で練習に励むなど、熱意を持って仕事と向き合っています。

安心して働き続けるため工夫と配慮の充実

高い目標に向かって挑戦できる環境がある一方で、社員が無理なく安心して働けるための工夫もしっかりと整えられています。年間の離職率はわずか3.4%程度と、非常に高い定着率を誇っています。



第45回全国アビリンピックのパソコンデータ入力競技で、銅賞を受賞したBさん。



Cさん(入社3年目／知的・発達障がい)

未経験でCADを習得年度優秀社員にも選出

現在は書類の電子化に加え、社内



ポラスグループ

埼玉県・千葉県・東京都を中心に、戸建分譲・注文住宅・リフォームなど住まいに関する多彩な事業を展開する住宅メーカー。

少ない建築CAD業務を担当しています。父がハウスクリーニングの仕事をしているため建築用語の基礎知識はありましたが、CADは未経験からのスタートでした。練習を重ねるうちに楽しさを感じ、一人で月に40棟分もの図面処理をこなす月もありました。新しい業務に挑み結果を出したことが評価され、昨年は『年度優秀社員』にも選出していただけました。大変なこともありますが、多様な業務にやりがいを感じています。

最後に、湯村さんは読者へメッセージを語ってくれました。

「一番大切な基本の条件は、『毎日元気に会社へ来てくれること』です。その上で、建築などの専門資格を持ちながらも、環境に恵まれず力を発揮しきれなかった方がいらつしやれば、ぜひ当社に来ていただきたいと思います。素晴らしい資格や能力を存分に活かしていただき、プロとして



ポラスシェアード株式会社

住宅事業を展開するポラスグループの特例子会社。全従業員の約62%が障がいのある方で、一人ひとりの特性を活かし、多様な現場で活躍している。
<https://p-shared.polus.co.jp/>



生きづらさの中で
続けてきた映画制作。

ADHDの 診断を経て、 還暦から 歩む君塚匠の今

25歳で映画監督デビューを果たした君塚匠さん。その華やかな経歴の裏では、ADHDの特性による生きづらさや大病との闘いがありました。55歳の時に診断を受けたADHDを公表して、今還暦を迎えて再び歩み出した君塚さんの「選択の人生」に迫ります。

君塚匠さん

映画監督・脚本家。25歳で監督デビューし、ドキュメンタリーや映像表現を中心に自己流のスタイルで活動。大病の寛解とADHDの診断を経て、著書の執筆など精力的に活躍中。

ゆで卵が真っ黒になる「過集中」も、制作の仕事では利点に

社会に出たばかりのアルバイト時代、資料整理などの事務作業が全くできず、上司から激しく叱られる日々を過ごし

積み重ねていく作業だからです。一見すると生きづらさにつながる特徴も、捉え方を変えれば、現在の活動を支える大きな強みになっています。

巨匠の現場に学びつつ、プロへの信頼と選択で作品をつくる

映画や映像の道を志した原点は、高校時代にロサンゼルスで脚本家の家にホームステイした経験でした。同時期に公開された『未知との遭遇』にも鮮烈な刺激を受け、毎日映画館へ通い詰めたといいます。25歳でデビューして以来、監督・脚本家としてキャリアを重ねてきた君塚さん。助監督経験がない君塚さんは勉強のため、巨匠・山田洋次監督をはじめ様々な監督の現場へ赴き薫陶を受けました。そこで学んだのは、どの巨匠もスタッフを心から信頼しているということ。君塚さんは各プロフェッショナルの知恵を活かし、それを頂点まで高めることこそが監督の役割だと考え、独自の

た君塚さん。「真面目に取り組んでいたのですが、行動がごとごとく裏目に出てしまう。それが最初に直面した生きづらさでした」と振り返ります。極度の方向音痴でもあり、重要な会議に1時間前に出発しても迷って遅刻してしまうなど、

演出スタイルを築いていきました。

また、常に最適な選択ができるよう、自身も美術館巡りなどを通して美的感覚や眼識を磨き続けてきた君塚さん。スタッフへの信頼と自身の妥協なき眼差しこそが、長年第一線で作品を生み出し続けてこられた原動力なのです。

大病の寛解、そして、巻き込まれて
始まる第二の人生

精力的に活動を続けてきた君塚さんですが、40代後半のときに大病を患い、生死の境をさまようという大きな試練に見舞われました。しかし8年前、徹底した食事療法と節制により見事に寛解。心身の健康を取り戻したことで、再び「表現したい」というエネルギーが戻ってきました。

体調の回復とともにADHDの診断を受けて公表すると、NHK出版をはじめ周囲から声がかかり、2冊の本の出版が決定。さらに、自身の特性を反映させ

当時は強いストレスを抱えていました。その一方で、ADHD（注意欠如多動性障害）の特性は「利点」にもなると語ります。一つの物事に没頭するとゾーンに入る「過集中」の状態になるのです。かつてインターネットに集中しすぎてゆで卵

たドキュメンタリーとドラマを融合させた映画作品も制作しました。本の出版などは周囲に「巻き込まれる」形で実現したものであり、「声をかけてもらえるのは自分の実力を認められた証拠だと誇りに思っています」と語る君塚さん。今後はこれまで培ってきた経験を活かかし、引き続き映画やドキュメンタリーをはじめ、多様な表現活動を焦らず自身のペースで探求し続けていく意向です。

生きづらさを感じたら、まずは
「好きなこと」から活路を見出す

現代は多様性が叫ばれ、精神障がいなどへの理解も進んできましたが、現在の障がい者雇用の仕組みにはまだまだ課題が残されていると語る君塚さん。障がいという枠に縛られるのではなく、個人の「特性」として社会が捉えるべきといいます。

還暦を迎えた人生の先輩として、生きづらさを抱えるメルディアの読者の皆さんへ、君塚さんは「自分は第二の人生

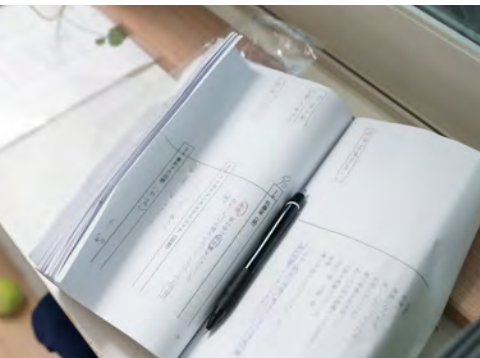
を茹でていることを完全に忘れ、真っ黒に焦げてボヤ騒ぎ寸前になったこともありました。こうした失敗を「くよくよと細かく気にしてしまう繊細さ」が、実は映画制作の現場で活かしています。ものづくりとは、小さなディテールを丁寧に

のスタートを切ってワクワクしているところ。エネルギーが湧くのは早い遅いもない」とエールを送ります。

「もし今、生きづらさを感じて悩んでいるのなら、まずは一人で抱え込まず、家族や行政などのセーフティネットを遠慮せずに頼って生活の基盤をつくってください。決して孤独にならず、そこから自分の好きなことや趣味へと徐々に目を向け、活路を見出してほしいと思います。過去の仕事や固定観念、そして年齢に囚われる必要はありません。これまで自分が興味を持てたこと、好きだったことに関連する何かの中に、次のステップへのヒントが隠されているはず。考えるよりも『まずは動いてみる』。自分の心が躍ることに向かって一歩を踏み出していけば、きっと充実した人生を歩んでいけるはず。』」



映画『星より静かに』に登場する格言が書かれた米粒は実際に作家によって制作。ディテールへのこだわりが伝わります。



昨年公開された、『星より静かに』は監督が初めて演者としても挑戦しました。ADHD公表後の第一弾作品です。



君塚監督の書籍『もう一度、表舞台に立つために：ADHDの映画監督 苦悩と再生の軌跡』（中央法規出版、2025）



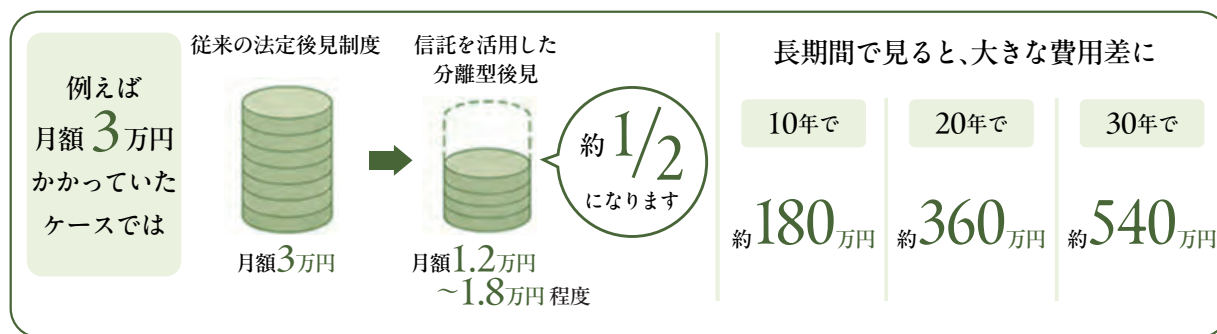
リットもあります。(下部イラスト参照)
従来の法定後見制度では財産額に応じて月額2万円～6万円程度の費用が掛かりますが、信託を活用した分離型後見では、身上保護部分だけをサポートするため、月額1.2万円～1.8万円程度に抑えられます。月額3万円かかっていたケースでは、約2分の1になり、10年で約180万円、20年で約360万円、30年で約540万円の費用差になる場合もあります。利用の目安は、金融資産(預貯金・有価証券・保険金)の合計が500万円以上の方、または自宅などの不動産をお持ちの方です。

一般的な信託銀行との違い

「信託」と聞くと信託銀行をイメージされる方が多いですが、大きな違いがあります。

一般的な信託銀行
・対象資産：預貯金を中心
・利用基準：原則金融資産1,000万円、000万円以上といった高いハードル
信託会社
・対象資産：預貯金・死亡保険金・自宅・その他不動産まで活用可能
・利用基準：高額な金融資産がなくても利用しやすい柔軟な対応が可能
「我が家には何が必要で、誰に相談したら良いかが分からない」親御様へ

最後に「親なきあと」に不安を抱える親御様へメッ



※上記は目安です。財産の状況や支援内容によって費用は異なります。

セージをお伝えします。「親御様が資産を残すことはスタート地点に過ぎません。遺したお金をお子様が最後まで正しく使えるよう設計することが重要です。」
「何から相談すればいいかわからない」という段階でも問題ありません。お一人おひとりご家庭の環境や状況に応じて慎重に話を進めていきます。ご相談回数3～6回(1～3ヶ月)ほど重ねられる方が多いです。契約に至るまでのご相談は、何回でも費用は一切掛かりません。「親なきあと」は、『いつか考える』ではなく、今から準備するかどうかで将来の結果が大きく変わります。テーマです。ぜひお気軽にご相談ください。



TSLひまわりトラスト設立準備 株式会社

TSL Himawari Trust Formation Co., Ltd.
信託士法人 東京新宿法律事務所グループ
TOKYO SHINJUKU LAW OFFICE

TSLひまわりトラスト設立準備株式会社 本店
(弁護士法人 東京新宿法律事務所グループ)

東京新宿法律事務所グループの安心感と法律・財産管理の専門性を背景に、「親なきあと」問題の解決に向けた新たな信託サービスを提唱。その実現を担う金融機関(信託会社)の設立に向けて準備を進めています。「分離型後見」を通じ、障がいのある方とご家族が世代を超えて最後まで安心して暮らせる社会を目指しています。

〒163-0548 東京都新宿区西新宿1-26-2 新宿野村ビル48階
「ご相談は何度でも無料」

お問い合わせはこちら▶ <https://himawari-trust.framer.website>

(左から)資産管理部長 松村 潤さん、取締役副社長COO 猪川 倫基さん、相続コンサルティング部長 常任 貴信さん



TSL Himawari Trust

資産だけでなく、「親の思い」と「ルール」を遺す。 「親なきあと」も自律と意思が尊重される社会へ ～従来の後見制度に頼らない新しい選択肢「分離型後見」とは～

語り:TSLひまわりトラスト

障がいのあるお子様を持つ親御様にとって、将来の「親なきあと」の暮らしやお金の管理は大きな不安要素です。法律事務所をバックグラウンドに持つ「TSLひまわりトラスト」は、親なきあと問題の解決を目指し、従来の後見制度に頼らない全く新しい仕組みである「分離型後見」を開発し提唱しています。

「親なきあと」に立ちはだかる
3つの不安と、既存制度の壁

自治体や支援現場に足を運び、親御様や支援者の切実な声に耳を傾けることで、私たちには一つの社会課題が見えてきました。それは、「支援を必要としている人が制度やサービスにたどり着けていない」という現実です。その背景には、多くの親御様に共通する3つの不安がありました。

1. お子様本人の生活と住まい
2. 親御様自身の老後の生活
3. 「親なきあと」の長期的な財産管理

これらはすべて連動しており、別々に考えることはできません。しかし、都内で障がい者支援が進んでいるとされる地域・自治体でも「財産管理の相談は表に出にくく、親の会や家庭内で抱え込まれがち」という実態があります。

また、既存の成年後見制度は、65歳以上の知的・精神障がいのある方の利用率がわずか3～6%にとどまっています。「家族が後見人に選ばれない」「一度始めるとやめられない・交代できない」「生涯費用がかかる」といった硬直性が、利用を躊躇させる大きな原因となっています。

官民連携モデル構築への挑戦 「全く新しい「分離型後見」とは」

この課題を解決するために私たちが

提唱するのが、これまでにない新たな仕組み「分離型後見」です。

従来の後見人は「財産管理」と「身の回りのサポート(身上保護)」の両方を1人で担っていました。分離型後見では、重い責任が伴う「財産管理」を信託会社に任せ、「身の回りのサポート」だけを市民後見人(身上後見人)などの顔なじみの存在に託します。これにより、弁護士などの専門家でなくても、日頃から本人に寄り添っている安心できる支援者がサポートに入りやすくなります。

TSLひまわりトラストでは、現在約1%にとどまっている市民後見人の就任比率を10%に引き上げることを目指し、各自治体や支援者と連携を進めています。これは、国が推進する「地域共生社会」や「権利擁護支援」の考え方も軌を一にするものです。高齢者や障がいのある方を地域全体で支える仕組みづくりが求められる中、TSLひまわりトラストは、財産管理を担う民間インフラとして新たな官民連携モデルの構築に挑戦しています。

「ルールの承継」で叶う 自由な設計と、月額費用の軽減

信託の最大の特徴は、単に資産を渡すだけの「資産の承継」ではなく、「ルールの承継」ができる点です。「誰が管理し、どのような場面で、何のた

めに使うのか」という親御様の願いを、元気なうちにルールとして組み込むことができます。

具体的な活用例

- ・障害年金が支給されない奇数月の15日に7万円をお子様の口座に振り込む
- ・一度に多額のお金を渡さず、計画的に使えるよう毎月10万円ずつ生活費として渡す
- ・医療・介護に備えて年間50万円まで優先的に確保できるようにする
- ・お子様を支える兄妹姉妹に負担が集中しないよう財産管理の役割・方法を決めておく

財産管理に対する家庭裁判所の介入がなくなることから、不動産の売却や金銭の支出許可に時間を要し生活が止まるリスクを避けられる自由度の高さが大きなポイントです。

なんといっても、費用面でも大きなメ

